**算数科概説で「学力調査」と「授業研究」について学んだこと**

（学籍番号）　（所属名）　（著者名）

**「学力調査」について学んだこと**

国内における学力調査の例としては，「全国学力・学習状況調査」，「埼玉県小・中学校学習状況調査」，「さいたま市小・中学校学習状況調査」の3つが挙げられる。

全国学力・学習状況調査は，義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から，全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し，教育施策の成果と課題を検証し，その改善を図ること，さらにはその分析を用いて，児童生徒への教育指導の充実や，学習状況の改善等に役立てることを目的としている。また，これらの取り組みを通じて教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立することを最終的な目標として定めている。算数科に関して，従来の同調査においては，知識に関わる問題である算数Aと，活用に関わる問題である算数Bに分けられていた。しかし平成31年度より，次期学習指導要領の趣旨を踏まえて，知識・活用を一体的に問うようになった。埼玉県小・中学校学習状況調査，さいたま市小・中学校学習状況調査に関しては，互いに類似しているものの，出題内容の方針が少し異なっている。

一方で，国際的に行われている学力調査の例としては，国際教育到達度評価学会(IEA)によるTIMSSと，経済協力開発機構(OECD)によるPISAの2つが挙げられる。現在，数学的リテラシーは「個人が現実世界において数学が果たす役割を認識し，建設的で積極的，思慮深い市民に求められる，十分な根拠に基づく判断や意思決定をしたりする助けとなるもの」と定義づけられており，その根拠として「数学化サイクル」が挙げられることがある。先に挙げた学力調査も，同定義に基づいて数学的リテラシーを測っている。またTIMSSでは，同一の参加者に対して継続的に調査を行うことで，得点や態度などの変化を調べることもしている。

**「授業研究」について学んだこと**

授業研究は「学習指導案」，「授業観察」，「研究協議会」の3要素から構成されている。これらは，まず授業計画を定め，その計画に基づいて授業を実施し，その様子を観察した後に，授業を検討するといったプロセスで行われる。授業研究に際しては，校長を中心とした実施体制と，キャリアのある教師による支援下で行われることが必要不可欠であり，授業実施時には子どもの発想を積極的に取り入れ，授業検討時には改善案を提示することが求められる。日本の授業研究は「授業実践の改善に関する責任を教師に与えている」として，諸外国でも高く評価されており，「日本流改善方式」と呼ばれることもある。また，授業研究会を行うにあたっては，授業研究トライアングルに基づき，「教師の視点」，「子供の視点」，「教材の視点」の3視点を意識し，各々の共通部分を増やしていくことが大切である。